

OB寄稿

ギター一部創立の頃

昭和35年生 助川 秀和

もう四半世紀以上も前、現役部員など多分この世にカゲも形もなかったであろう昭和35年、ギタークラブは誕生した。

きっかけはどうってことはない。からきし下手なくせにギターが3度のメシよりも好きで、大学に行ったらギタークラブに入ることを夢見て、受験勉強中もギターばかり弾いていた男が入学してきたからである。

ところが、そんなクラブはなかった。60年安保や三井三池争議やら、世の中騒然としていた頃でもあり、歌声喫茶まがいの部などはあったがクラシック・ギターとなるとない。大変ガッカリして、一番丁の第一楽器店で楽譜を見ていたら、隣でギターの楽譜を見ている東北大生がいる。聞けば、かなり弾くらしい。そこで「何とかならんもんかねエー」とクラブの話をしてみた。どうしてそうなったのか、よく覚えていないのだが、そのうちに「じゃ、二人で作ろうや」ということになり、他人がお膳立てしてくれたのには喜んで乗るが自分でお膳立てするのは全く不向きという私めが自ら部員募集のポスターをつくるはめになったのであった。

翌日、書き上げたポスターをもって学生部といったかしら、要するに部活動を管轄する所に行って事務の人に部設置とポスター掲示のお願いをした。ギター、というと古賀正男の「酒は涙か溜め息か」と「湯の町エレジー」しか知らなかった（であろう）事務の人はかなりウサンくさそうな顔をしていたが、ポスターを抱えてベソをかいている私を哀れに思ったのか「まあ、やってみてください」と言ってくれた。

今でも覚えているのだが、その前の年、あのセゴビアが再度の来日をした時、私は東京・大手町のサンケイホールに聞きに行った。曲目などはすっかり忘れてしまったが、あの甘いセゴビアトーンと驚異的なテクニック、それと演奏会場の環境の悪さは驚くべきものだった。演奏中も人が出入りするは、話声はするは、外の車の音まで入ってくる始末。私は気がつかなかったが、演奏途中でセゴビアは「静かにしろ」と怒鳴ったそうである。すっかり気分を害したセゴビアは以後約20年来日しなかった。クラシックギターを取り巻く環境は、演歌の流しと余り変わらなかったのである。

そんなわけで、事務の人の態度も納得、早速部員募集のポスターを校内に掲示した。私が大汗かいてポスターを張っているのを、同じくギター狂だった宍戸忠夫君は後ろでナルホドナルホドと見ていたそうである。宍戸君とは当時一面識もなかったが、以後、現在にいたるまで二重奏の相手をお願いしたり家族ぐるみのお付き合いをさせてもらうようになった。

さて、ポスターで呼び掛けた集合日、川内のやや広い教室を借りてあったので、そこを集合場所にしたのだが、20人ぐらい集まっただろうか。やあ、これはよかったと思っていたところが、肝心の同志がいくら待っても来ない。集めたはいいが、その後のことは考えていなかったものだから途方にくれてしまったが、集まった人達に相談しながら部活動をスタートさせたのであった。今でもつくづく思うのだが、この時集まったメンバーのレベルは、当時としても国内でも相当のものだったように思う。村井啓、遠藤邦夫両氏などプロ級の人達が創立時から部員としていたのであった。

メンバーが固まったので、教室を貰おう、というとなり今度は意気揚々とまた事務の人の所に行き談判をした。すると顧問の先生がいなくてはダメだという。誰がいいか、皆で考え込んでしまったが、そのうち宍戸君が「予備校で教わった教養部の英語の先生が確か音楽好きだと言っていた」と言い出した。滝沢という先生だという。そうか、それならすぐ頼みに行こう、というんで川内の公務員住宅（だったと思う）に住んでおられた滝沢寿三先生をギターを抱えてお尋ねした。もう夜になっていたと思うが、先生は快く顧問役を引き受けて下さったのであった。

ほかのことは忘れてしまったが、その時、何か一曲、といわれて宍戸君が弾いたところそういう姿勢で長い時間演奏して胸を悪くしませんか、と先生が言われたのを妙に覚えている。まだ肺結核が死亡原因の上位にあった頃の話である。